知の発信と開放をめざして

中央図書館長　村　瀬　憲　夫

六年間の長きにわたりまして、中央図書館の充実と発展にご尽力賜りました、故櫻井齊前館長のご退任を受けまして、四月より館長を拝命いたしました。力不足でございますが、どうかよろしくお願い申し上げます。

近畿大学21世紀教育改革委員会「図書館対策検討委員会」では、櫻井委員長のもと、精力的な検討がなされまして、山積する多くの課題に対して、その解決への道筋がつけられ、着々と実行に移されています。

またこのたび九月には図書館システムが全面的にリニュアールしまして、図書館における電子情報等の利用活用がより便利になりました。これに連動して図書館は「情報の見張り番」（私立大学図書館協会2009年度西地区部会報告）として、良い情報の選択という役割をも果たすことになります。

さて「図書館対策検討委員会」は中央図書館の役割を「知の殿堂と拠点」と位置づけました。これを継承し、「貴重有益有用な図書資料等の収集と管理保全」そして「その利用活用に向けての一層のサービスの充実化」という図書館の基本的業務をさらに推し進めることは言を俟ちませんが、そのうえで、次なる目標は「知の発信と開放」であろうと、私は考えます。

近畿大学が現在、学園内の各学部、各研究所等に蓄積している「知」は、膨大な量と質を誇ります。この貴重な「知」を、図書館という性格と絡めつつ、学内外に発信し開放していくひとつの拠点として、中央図書館はその役割を担うべきものと思います。

そのための施策のひとつとして中央図書館主催の定期的恒常的な公開講座の開催がまず考えられます。図書館が、学内の教職員に情報発信の協力依頼を行い、知の発信と開放の場を提供するのです。図書館の側から申せば、こうした講座への参加、あるいは参加呼びかけを通して、多くの人が図書館に関心を持ち、ひいては図書館の活発な利用へのきっかけをつくるという目論見もあります。すでに昨年度から、「蔵書展」の開催にあわせた「ギャラリートーク」が始まっています。

今、大学図書館には、多方面にわたる知の発信と開放の場としての機能が求められています。「研究」をサポートする場であると同時に、各学部での「教育」をサポートする場としての機能を果たすことも、知の開放のひとつと言えましょう。例えば基礎ゼミの一コマとして活用されている新入生向けの「図書館ガイダンス」も、また「データベース体験講座」もそのひとつと言えます。さらに卒業時までのきめ細かな持続的な教育サポートを実施している大学図書館も増えています。図書館が学部カリキュラムの一翼を担うことを志向している大学も増えています。また本学でもすでに実施している、学生に図書館で購入する図書を選んでもらう「学生選書の会」、それも各自選んだ図書への書評も書いてもらうとなれば、これはもう教育そのものと言えましょう。

また図書館（閲覧）と飲食物はご法度という常識を越えて、もちろんそれは限られた空間と限られた図書に限定されますが、カフェテリア風の空間の中で、学生と教員と職員が図書を仲立ちとして交流し、教育の質を高めている大学図書館も出てきました。

また大学図書館は、地域にも広く開放され

ていくことが必要です。本学においても、すでに東大阪市の市民の方々へ開かれつつあります。そして東大阪市の有する貴重な文化・歴史・文学・理工系の先端技術等を市民に向けて広く発信し開放していくことも実行したく思います。

このように、これからの大学図書館は、「教育」を視野におきながら、さまざまな意味で知を発信し、開放していくことが求められていると言えましょう。

※※※※※※※※※※※※

少し堅い物言いになりましたので、今度は私の専門としている『万葉集』を話題にして、万葉の歌を発信し開放してみましょう。

近畿大学の東大阪キャンパスの東方には朝な夕なに、ゆったりと横たわる生駒の峰を望むことが出来ます。近畿大学校歌は「金剛山はほのぼのと明けて生駒も目ざめたり♪」と、生駒の目ざめから始まります。近畿大学に学び、そしてここを巣立っていく学生にとって、生駒はふるさとの山と申せましょう。

今から1270年ほど前に、この生駒山が万葉集に詠まれています。

夕されば　ひぐらし来鳴く　生駒山
越えてぞ我が来る　妹が目を欲り
妹に逢はず　あらばすべなみ　岩根踏む
生駒の山を　越えてぞ我が来る

これは天平八年（736）に、国家の命により、朝鮮半島の新羅国に派遣された一行（遣新羅使）のうちの二人が残した歌で、難波津（現在の大阪城の少し南にある難波宮趾のすぐ西はもう海で、そこが大きな港でした）からの船出を待っていた時のものです。

この二人の男はひそかに宿所を抜け出して、生駒山を登り降りして、平城の都（現在の奈良市）にいる妹（妻、恋人）に逢いに行ってきたのです。ヒグラシがカナカナと鳴きしきる寂しく恐ろしい、そして岩のごつごつした険しい生駒の山道を駆けたのです。「妹に逢いたい！」の初一念で。

さあ私たちも図書館を出て、生駒山へ登ってみましょう。生駒山越えの道にはいくつものルートがありますが、東大阪市の枚岡から登り暗峠を越える道は、今も一部ですが石畳の残る趣きのある道です。そこを越えてみましょう。大変な急な山道です。あえぎあえぎ、休み休みしながらやっと峠にたどり着きます。

その生駒山の尾根からは西眼下に難波の海を見はるかすことができます。太陽に照らされてキラキラと輝く広大な海が、登坂の疲れから開放してくれます。

直越の　この道にてし　おしてるや
難波の海と　名付けけらしも

「おしてるや」とは「難波」にかかる枕詞です。この旅人（今の二人とは無関係の別時の歌です）は、難波の海を押して照らすように、太陽がSUN・SUNと海を照らす光景を見て、なるほどこれが枕詞「押し照る」の由来なのかと、納得したという歌です。

それにしてもこの二人の男の、妻恋いの意志には大変な迫力がありますね。実際にこの暗峠越えの急坂を息絶え絶えに登ったうえで、この歌を改めて読みますと、その迫力が実感として伝わってきます。この男たちは肉食系男子であったにちがいありません。そしてその男たちを待つ、妻たちも決して「亭主元気で留守がいい」などとうそぶく女性ではなかったでしょう。

この歌を読んでいますと、急な山道を駆け登る男たちの身体から吹き出す、返り血ならぬ返り汗を浴びたような気がしませんか？

さてこんな実感を胸に、図書館に戻りましょう。そして『万葉集』を開いてこの歌を確認しましょう。そこにはこの遣新羅使の折の歌が145首も残されています（万葉集巻15）。瀬戸内海を西下していく道々の歌が臨場感豊かに歌われています。途中で「逆風」に襲われて漂流したことも、また「鬼病」（疫病、天然痘か）に罹って命を落とす者が出たことも分かります。この頃、九州地方を中心に疫病が蔓延しつつあったようで、その後、政府の中核をなしていた人々も次々と罹患し命を落とします。

続いて『続日本紀』（『日本書紀』を継ぐ歴史書です）を開いてみましょう。当時の歴史状況の中で、145首の歌々を実感として味わうことができます。万葉集の良さは、当時の歴史事象と重ねて読み味わうことができる面を持っている点です。出発が六月で、秋の帰還が望まれていた（万葉集）のに、実際に帰還したのは、翌天平九年正月二十六日のことでした。しかもこの間、遣新羅大使は死亡、副使は病に罹って入京がかないませんでした。帰還した者の報告によれば、使いに対する新羅国の対応はきわめて冷たかったようです。心身ともに厳しい旅でありました。

さらに頑張って、万葉集や古代史の研究書にまで手を広げれば、遣新羅使人歌群の歌々に対する理解が一層深まります。

そして活字に倦んだら、書物から目を上げて、生駒山をあらためて望み見てください。今まで何気なしに見ていた生駒山が、なにかしらとても愛おしい山として胸に迫ってくることでしょう。